

## 武蔵野日曜聖書講筵

## 信行

## ――マタイ伝第4章12～25節――

1993年4月18日

小池辰雄

心も身も全部向き直れ 「即」とは逆転構造 信行 ビーの世界 直ちに 言行一如 聖書を  
現実として読む 頑張らない こちらは空っぽ

## 【マタイ4】

12 イエス、ヨハネの囚われし事をききて、ガリラヤに退き、13 後ナザレを去りて、ゼブルンとナフタリとの境なる海辺のカペナウムに到りて住み給う。  
14 これは預言者イザヤによりて云われたる言の成就せん為なり。曰く、15 『ゼブルンの地、ナフタリの地、海の辺、ヨルダンの彼方、異邦人のガリラヤ、  
16 暗に坐する民は、大なる光を見、死の地と死の蔭とに坐する者に、光のほれり』

17 この時よりイエス教を宣べはじめて言い給う 『なんじら悔改めよ、天国は近づきたり』

18 斯て、ガリラヤの海辺をあゆみて、二人の兄弟ペテロというシモンとその兄弟アンデレとが、海に網打ちおるを見給う、かれらは漁人なり。19 これに言いたもう 『我に従いきたれ、然らば汝ら人を漁る者となさん』 20 かれら直ちに網をすてて従う。21 更に進みゆきて、又ふたりの兄弟、ゼベダイの子ヤコブとその兄弟ヨハネとが、父ゼベダイとともに舟にありて網を繕いおるを見て呼び給えば、22 直ちに舟と父とを置きて従う。

23 イエス遍くガリラヤを巡り、会堂にて教をなし、御国の福音を宣べつたえ、民の中のもろもろの病、もろもろの疾患をいやし給う。24 その噂あまねくシリヤに広まり、人々すべての悩めるもの、即ちさまざまの病と苦痛とに罹れるもの、悪鬼に憑かれたるもの、癩癩および中風の者などを連れ来りたれば、イエス之を医したもう。25 ガリラヤ、デカポリス、エルサレム、ユダヤ及びヨルダンの彼方より大なる群衆きたり従えり。

## ●心も身も全部向き直れ

マタイ伝4章12節から、



12 イエス、ヨハネの囚われし事をききて、ガリラヤに退き、<sup>13</sup> 後ナザレを去りて、ゼブルンとナフタリとの境なる海辺のカペナウムに到りて住み給う。

キリストがサタンとの一騎打をユダの荒野でなさいましたが、それから約一年——一年に少し欠けますけれども——経つて、今日のところになるわけです。

「預言者は故里にいれられず」

というので、イエスはナザレでは、いる必要がなくてガリラヤ湖のほとりへ行つた。ガリラヤがキリストの伝道の根拠地です。特にガリラヤ湖の北のカペナウムには長くおられた。そこに住んでおられた。カペナウムは「ケファル・ナフーム」といつて、「ケファル」は村、「ナフーム」は慰めという意味ですから「慰めの村」という意味です。

14 これは預言者イザヤによりて云われたる言の成就せん為なり。曰く、<sup>15</sup> 『ゼ

ブルンの地、ナフタリの地、海の辺、ヨルダンの彼方、異邦人のガリラヤ、

16 暗に坐する民は、大なる光を見、死の地と死の蔭とに坐する者に、光のぼれり』

「海」とはガリラヤ湖のことです。「暗い」というのは精神的にダメな所ということ。「死の地」とは死んだような非常に望みのない暗い所という意味で、そこに光が臨んだ。西の海岸の所の「ツロ、シドン」という地名がよく出てくるでしょ。あそこらがやっぱり「暗き所」の一つなんです。

17 この時よりイエスを教を宣べはじめて言い給う『なんじら悔改めよ、天国

は近づきたり』

「教」という言い方は私はあまり好きではない。キリストは本当のことを述べているのを、「教を宣べたもう」という。

「なんじら悔改めよ、天国は近づきたり」

このことはキリストの先駆者である洗礼のヨハネも言った言葉ですが、

「心も身体も方向転換しろ」

というのがこの「悔改」という字で、「悔改」という訳はあまり感心しない。

神の愛の、力の、生命の支配するところが「天国」です。それが近づいた。ということは、キリスト自身が天国体だから、はつきりおっしゃるわけです。

●「即」とは逆転構造

イエスの言というのは力がある。キリスト自身の生命力は我々の生命力と違う。もの凄い霊的な生命に満ちておられる。だから、その言葉も行為も全部、力がある。我々の言葉や行為とは違う。そういう神の力に満ちている。ところが、キリスト自身は、

「自分は何ものでもない。何も言えない。何もできない。神さまがさせたんだ。神さまが言わせているんだ」



と仰った。キリストは神さまの前に本当に平伏しの魂でゼロなんだ。無は無限大に通ずる。無限無量です。無即無限無量という。だから、無の世界は凄い。この無限無量の世界が即ち聖霊の世界です。こちらは十字架で無とされている。悟りの無ではない。我々の自我というものは十字架ですつ飛ばされている。そこに聖霊が臨む。

私は簡単にそう言うけれども、もちろん私は二重構造です。すつ飛ばされていない相対的な人間小池というダメなやつがいます。しかし、その奥に本当にすつ飛ばされている根源現実をいただいているわけです。悟っているのではない。いただいている。そこにこの無限無量の聖霊が臨んでくる。そういう現実をもっているクリスチャンはほとんどいないかも知れない。

「聖書の研究だ、祈りだ」

なんて言って、みなこちら側のはなしになっている。ダメだよ、こちら側ではない。

キリストがなぜ凄いかというと、本当に自分をゼロにしていたから、

「我を見し者は父を見しなり」

と言った。ゼロになっっているから、父が、神さまが100%に入ってきたから、「私を見た者は神さまを見た」と仰った。そういう無即無限無量という、十字架即聖霊の世界です。十字架だけではダメなんです。

「即」という字は非常に意味の深い字です。この「即」は逆転構造になっているということです。柳宗悦という人は「即如」という言葉が好きで、

「本当の宗教の世界は即如の世界だ」

と言っている。

坐禅して無の境地に入るといいうのも一つの道でしょう。けれども、それはなかなか大変だ。我々のは賜っている無なんだ。相対的な存在はしようがないから、投げ出して、賜っている無だ。それが根源現実として根底に来ると、無限無量なところが展開してくる。この「即」というのはそういう字です。

## ● 信行

ここに集まっていらいっしやる方は少ないけれども、あなた方は本当にこれを受けとってくださいよ。そうすれば、あなた方を通してまた展開していくから。私はいつまでもやっているわけにはいかない。種を播まいているんだ。あなた方一人ひとりには必ず展開する使命を持っている。人数は少なくてもいい。多い必要はない。キリストの本当の弟子は数えるくらいしかない。五指に数えられるくらいだ。マタイ、マルコ、ルカ、ヨハネ、パウロ、ペテロ。特にパウロは凄い。パウロの伝道と手紙をとおして、キリスト道は世界の果てまで、世の終りまで続くわけだ。とにかく、パウロというのは大変なものだ、もともとキリストに逆らっていたやつだから。あなた方もそういう使命をもっている。



15 『ゼブルンの地、ナフタリの地、海の辺、ヨルダンの彼方、異邦人のガリラヤ、<sup>16</sup> 暗に坐する民は、大なる光を見、死の地と死の蔭とに坐する者に、光のぼれり』

これは預言者イザヤの8章に出ている。この時よりキリストが宣べて、

「汝ら方向転換しろ、神の国は近づいた」

と。洗礼のヨハネも前にこう言ったけれども、同じ言葉を言っても、中身は違う。実力を持つて人が言うのと、ただそれを伝えてるのは次元が違う。

<sup>18</sup> 斯て、ガリラヤの海辺をあゆみて、二人の兄弟ペテロというシモンとその兄弟アンデレとが、海に網打ちおるを見給う、かれらは漁人なり。<sup>19</sup> これに言いたもう 『我に従いきたれ、然らば汝らを人を漁る者となさん』

キリストの弟子は大体、ガリラヤ湖畔の漁師なんだ。また、こここの近所で生まれた連中なんです。洗礼のヨハネのお母さんとキリストのお母さんマリヤとは親族関係だ。洗礼のヨハネはキリストとそういう血のつながりがあるようなものだ。

「我に従いきたれ、然らば汝らを人を漁る者となさん」

とある。今日は題に

「信行」

と書いた。「しんこう」の「こう」は「仰ぐ」ではダメだ。「信行」或いは「信人」です。「信仰」と言って、いつまでも仰いでいたってしょうがない。信ずるといふのは、その中に信入することなんです。信じ入る。キリストと一つとなる。そうすると、そこから力がくるから行がおのずから出る。

「信じてそれから行いをする」

のではない。本当に信入すれば、行ないが出ざるを得ない、現象せざるを得ない。何でも本当の現実というものは、繋がっている。二段構えではない。一つなんだ。ところが、人間は、それがよくズレたりしますけれども、本来は一つなんです。頭で受けとったら必ずズレる。全存在で受けとらないとね。

## ●ビーの世界

内村先生がいつか言われたけれども、「ビー クリスチャン」と「ドゥー クリスチャン」がある。

「ドゥー クリスチャンで一生懸命にやったって、これはダメだ。ビー クリスチャンであれ。その中にいる。そうしたら、行為がおのずから出てくる」

と。「ビー(存在)」の世界です。本当の「在る」という世界です。

神さまは、

「我は有りて在るものなり」



という。私はこれを

「我は在りて在らしむるものなり」

と訳す。神さまやキリストは、在ることが他を在らしめている。太陽が在ることが地球を在らしめている。そういう在り方が一番本當の在り方です。力を持つている。生命を持つている。在らしめる、「レッツ ビー」(英)、「ザイン ラッセン」(独)です。そういう力のある「ビー」、「ザイン」でないよね。ドイツ語でいえば、「ヴィルクザーメス ザイン(力のある存在)」という。

だから、キリストが

「従いきたれ」

と言うと、その言に力があるものだから、従わざるを得なくなる。

「さあ……」

なんて考えているヒマはない。参ってしまっただ、とんでもない力があるものだから。存在に力がある、言葉に力がある、行為に力がある。イエスという靈止ひとを、そういう力ある存在を、生命ある存在、光の存在ということを受けとる。

キリストの言には権威と力が、憐れみが、愛がありますから。キリストの言は「教え」ではない。人を動かす言なんです。キリストをわかろうとして、いくら解釈して研究したつてわかりつこない。キリストの言の中に自分を投げ入れなければ。キリストの行為の中に自分を投げ入れなければ。それが祈入いする世界です。祈り入る。そうすると、身体に感じてくる。意味の世界ではないから。そういう、

「力ある、生命ある、光ある言」

として読まなければ、いくら読んでもダメなんです。そういうのを本當の身読しんぎくという。身体からだで読む。そうすると、聖書は楽しくてしょうがない。たくさん読む必要はない。

### ●直ちに

「人を漁すなひる者にする」

という。ペテロは後から本當にそうなった。それは、キリストは人を見て、わかるんだ、「これは頼みがいのあるやつだ。これはダメだ」

というようなことはキリストはわかりますから、誰に向かってもやっているわけではない。<sup>20</sup>かれら直ただちに網をすてて従う。

これが凄い。マルコ伝にもよく「直ちに」という言葉が出ています。

「マルコ伝は直ちに福音書だ」

と言うくらいに出てくる。直すぐ従った。キリストの言につかまえられるものだから、力があるから、圧倒される。だから、直やちに止めて従います。考える余地がない。

「直ちに網をすてて従う」



なかなかこれはできないことだ。生活の問題なんか考えない。直ちに従った。

21更に進みゆきて、又ふたりの兄弟、ゼベダイの子ヤコブとその兄弟ヨハネとが、父ゼベダイとともに舟ふねにありて網を繕つくろいおるを見て呼び給えば、<sup>22</sup>直ちに舟と父とを置きて従う。

これが信行の世界です。直ちにとというのは二段構えでなくて、一段なんだ。私たちは――私たちが私か知らないけれども――これをなかなかやらない。

「伝道だけしてればいい」

なんて思つて、私は直ぐ大学教授を辞めたかというのと、辞めないんだ。たとえ大学教授を辞めなくても、その形態面でなくて、魂の世界では本当にキリストの僕という自覚を持つことが非常に大事なことです。形態面では変わらなくても、内容の実質面では変わっている。キリストに従っていると、同じく大学で教授してものを言っている、その質が違ってくる。いわゆるお説教するわけではない。けれども、その講義の質が違ってくる。福音の力が内在しているから。

教育者というのは、良い意味において宗教の世界が内在しているような――仏教だつていいですよ――教育者でなければダメなんだ。深い宗教心を持たない教育者は本当は教育にならない。だから、ダメなんです、日本の教育は。

「教育者は心に宗教を持って」

ということですよ。これをもう少し一般的な言葉でいうと、西郷南洲の、

「敬天愛人」

です。南洲の人物の素晴らしさを私はその角度から見ている。

どの信仰でも、或いは信仰がなくても、本当に全身をもつて打ち込んで仕事をしている人、何かしている人、そういう在り方の人には私は敬意を表します。要するに、何をやっておられても投身なげみの人に対しては敬意を表します。いわゆる宗教的判断はしない。計算ずくでやっているのは、みんなダメです。それが芸術家であろうと、芸能人であろうといい。美空ひばりなんてのは本当に歌に生きぬいた。分裂のない在り方です。

<sup>22</sup>直ちに舟と父とを置きて従う。

こういう叙述は非常に力強い内容です。捨てたと思つたら、今度はやがてそれを救い上げる力を持つ。決して憎んで捨てたのでも、無情で捨てたのでもない。「棄身すてみ」という言葉は素晴らしい言葉だ。己を棄てて従う。従う時には、己を棄てていなければ、本当は従えない。

「己を棄てて、己が十字架を負いて我に従え」

とある。キリストは「己を棄てて」と言っておられる。

「己を棄てて十字架を負う」

なんて、妙な、論理に合わないようなことをおっしゃる。これは棄身の態勢なんです。投



身といってもいい。自殺ではない。棄身の態勢でいけば、剣の世界でもそれが勝つ。

### ●言行一如

キリストの存在、その言、その行為がみな力を持つているものだから、それに圧倒されて動かされる。私たちが聖書を読むときも、特に福音書のキリストは——意味でも何でもない——グーッと文字の後ろからキリストの力が、光が、生命が、愛がやってくる。だから、聖書は哲学や単なる文学とは違う。文学でもその奥にそういう世界を持つている文学はやっぱり凄い。私はその意味でユゴアの『レ・ミゼラブル』は好きだ。

23 イエス遍くガリラヤを巡り、会堂にて教をなし、御国の福音を宣べつたえ、民の中のもろもろの病、もろもろの疾患をいやし給う。

福音を語ることに、相手を精神状態も肉体の状態も健やかにして福音の世界に入れてしまふ。これも言行一如です。それができたのは、やっぱりパウロです。ペテロもかなりやりました。けれども、キリストに次いではパウロが一番やった。そういう力をいただいた。キリストは片っ端から治してしまう。死人まで甦らせるひとですから。柩に手を置いて、

「起きよ！」

と例えば、死人が甦ってきた。大変な霊止です。お釈迦さんだつてキリストにはかなわない。イエス・キリストというひとは絶対次元といつてもいいような方です。驚くべき人物です。復活のキリストがお魚を食べたりなんかした。

彼らはその時に素晴らしいものを聴いているんだけど、本当に受けとるには、まず一つの大事なことがあった。言うまでもなく、キリストが十字架に架かつて、贖罪の死を遂げることです。

「お前たち、祈って待つていろ、今に聖霊がきたら…」

と。それまでは、いくらペテロはキリストに近づいていても、その世界には入れない。十字架・聖霊のその因果関係も事実が証明しているわけです。

病がどんどん治った。けれども、それから先はどうなつたか知りません。

民の中のもろもろの病、もろもろの疾患をいやし給う。

と。肉体的にも精神的にも治した。ということは、キリストの天国的な現実を予表されたわけです。癒されたことはまだ本当の癒してはいないけれども、一つの徴なんです。

24 その噂あまねくシリヤに広まり、人々すべての悩めるもの、即ちさまざまの病と苦痛とに罹れるもの、悪鬼に憑かれたるもの、癩癩および中風の者などを連れ来りたれば、イエス之を医したもう。

片っ端から治してしまつた。何でもなく読んでいられるけれども、内容は何でもなくはない。大変なことなんだ。ジーツと祈り込んで、ジーツと静かに深く読むことが大事です。参考書なんか要らん。



七つの悪鬼に憑かれたマグダラのマリヤは——「マグダラ」という所はガリラヤ湖の西の方にある——キリストを一番慕った女性です。キリストの十字架の死の前に香油を頭からキリストに注いだのはあのマグダラのマリヤです。

<sup>25</sup>ガリラヤ、デカポリス、エルサレム、ユダヤ及びヨルダンの彼方より大なる群衆ぐんしゅうきたり従えり。

「デカポリス」というのはデカ(十の)ポリス(市)、「十市」という地方の名前です。大変だ、あの辺全部だ。「ヨルダンの彼方」というのはヨルダンの東の方です。

### ●聖書を現実として読む

これはキリストの伝道の最初のところですけども、我々は聖書をいつも我々の現実として読まなければダメです。歴史的な現実と同時に、我々が「:」について「知るのではなくて、その現実の中に自分を入れて、二千年前を今の時に入れて読む。キルケゴールがそれ式なことを言っている。「同時性」ということです。

聖書を読んでいて力がこないのは、現実として読まないからです。「:」について「知ったってどうにもならない。その中に入って現実として、一人称と二人称の間で読む——三人称ではダメなんだ——そういう読み方が聖書の凄さなんです。

「直ぐ舟と父とを棄てて従った」

とあるから、

「私もその真似まねをしよう」

なんて、真似したってダメです。無理したってダメなんだ。相対的現実はそのままでいいけれども、もうひとつ奥の現実でその中に入らなくては。そうすると、生き方が変わってくる。真似ごとはすべてダメ。それを如何にして自分に現実化するかということをも自分で体験していく。

普通の註解書を見ていると、嫌になってしまふ。面倒臭くなってしまう。

「その中に入りなさい」

なんていう註解はほとんどない。「について」語っている。何ごとも「について」語っているのは、第三者的でダメです。

我々はいろいろな病気にかかったり、風邪をひいたり、いろいろあるでしょうけれども、お医者さんにかかったって、薬を飲んだっていいですよ。けれども、本当の医者、本当の薬はキリストの生命いのちだということ忘れてはいかん。そして、その中に深く祈り込むと——大体、いわゆる薬品的なものは一時的には良さそうだけれども、身体には本当は良くはない——祈りの世界はやっぱり凄い、病を癒してしまう。外科的なものはまた別な消息がありますけれども。外科的なものにしても、キリストの力がくれば、また違います。手術なんかしても、本当に祈っている人は出血が少ない。



「自分で直ちに従う」という力みではない。キリストの力がそういうように動かす。そういう受けとり方をしなければダメです。キリストの力を受けとる。力んで「直ちに」なんて思うと、これは無理がいく。すべてが「ざるを得ない」世界です。自然法則も、雨が降れば地面は濡れざるを得ない。風が吹けば木の葉は揺れざるを得ない。キリストに來れば、斯くならざるを得ない。靈的な世界も、自然的な法則も同じなわけです。靈法も自然法も現象的には同じです。ざるを得ない世界です。

英語の「マスト」やドイツ語の「ミュッセン」という字は「ねばならない」という意味と、「ざるを得ない」というのと二つの意味がある。その「ざるを得ない」方です。英語の「シャルビー」、ドイツ語の「ゾレン」もそういう意味がある。

我々が何をするのでも、このキリストの力は、生命は、光は、みなそれが根源の世界であつて、それから可能になる。ナポレオンが

「不可能なし」

と言つたそうだが、そういう意味でクリスチャンこそ、本当の「不可能なし」ということが本質的には言えるわけです。

### ● 頑張らない

よく「頑張れ」と言うね。「頑張れ」と言われても、私はいわゆる自分で頑張ろうとは思わない。頑張ると、くたびれる。頑張る必要はない。

「本ものを受けとつていきますよ」ということです。

「本ものを受けとれ」

と、本当はこれがいい。頑張らない。本ものなしで頑張つたら、くたびれてしまう。ところが、本ものを受けとると、本質的な意味で疲れを知らないひとになる。眠くはなるが、しかし、

「ああ、嫌になった」

なんていう、そういう気が起きない。

キリストを受けとると、直ちにこうせざるを得ない。この弟子たちはみなガリラヤ湖畔の人たちです。大体、北の方の人が多し。広い意味で同じような郷土の人たちです。ガリラヤ湖畔というのは大事だ。特に、北と西の方。ナザレはもう少し離れている。第二の故里、本当の故里はカペナウムです。カペナウムがキリストの靈的な故里、伝道を中心です。

しかし、これは歴史的な現実ですけれども、我々においての現在としては、どこでもカペナウムになつてしまふ。あなた方はやはりキリストに動かされて、知らずして伝道してしまふ。その時に遠慮は要らない。本当のことを語つた方がいい。

「我を否む者は、我知らず」



なんてキリストが言われた。キリストを否んではいかん。本当のことというものは、何らかの意味で必ず相手にひびく。怪しく思おうが、別な世界と思おうが、何かひびく。人間の心というものは本ものには感ずる。だから、本ものに水を割ったらいかん。あなた方の同僚や、会社の人でもいい、「この人は」と思ったら、一対一で語ってあげなさい。批判的な人には語る必要はない、すぐ頭で批判するような人は受けとらないから。でも、語っても無駄ではない。

「あいつはあんなことを言ったが、やっぱりあれは本当だ」  
なんて、後から悟るといふこともあり得ます。だから、本当のことを言うのに遠慮は要らん。

### ●こちらは空っぽ

日蓮というのは凄いやつだけれども、他宗をあれまで排撃したのは、ちよつと間違いだ。念仏の世界だつて大事なんだ。念仏の世界をえらくけなしているけれども。強烈な人格というのとはかくそういうところがある。他の善さというものが見えない。自分と同じように思わなければ、それを容れないという、そういう狭量になったらダメです。

キリストの福音を本当に受けとると、いろいろなものを読んでも、その位置付けができる。その限界が見える。また、そこに有る本ものの善さも見える。ある一つの立場ではない。立場なき立場ということもおかしいけれども、そこが本当の無の世界なんだ。無即無限無量の世界。こちらに無限無量があるから、位置付けができる。相手が日蓮であろうが誰であろうが、一向差し支えない。それは凄いですよ、その偉さとその善さとその限界とがみな見えてくるから。それは私が偉くなったのでも何でも無い。福音が凄いから。こちらが空っぽだからです。

無色だから、映るものはちゃんと映ってくる。こちらが一つの色をもっていたら、映らない。とにかく、無の世界というのは本当に凄い。だから、さつきから言っている無即無限無量なんです。無限無量の展開をもたないような無ではダメです。それは虚無になってしまう。逆に言うと、無が最も力をもっている。普通は、

「もつとよく聖書を研究しなさい。もつとお祈りしなさい」  
だとか、

「こういう参考書を読みなさい」  
だとか言っている。そうではない。要するに、キリストを受けとることです。そうしたら、自由自在に展開します。

